



# 若奥様たちの 淫らなお買い物

柔尻営業日誌

庵乃音人

挿絵／羽津樹

立ち読み版

KTC  
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

プロローグ	そして、淫らな訪問販売が始まる	4
第一章	ロリ顔巨乳妻の誘惑	6
第二章	妖艶痴女マダム淫らなアナル	52
第三章	清楚なメガネ妻とお風呂で	93
第四章	美人妻たちの秘密のエッチ	142
第五章	世にも美しい淫乱痴女たち	213
エピローグ	今日もみんな	282

## 登場人物

Characters

### 穂村夕菜子

(ほむら ゆなこ)

上品な眼鏡と流れるような黒髪がチャームポイントの、生真面目で清楚な若妻。いたって物腰の柔らかい、庶民的な落ち着きを持つ女性。

### 菱橋みくね

(ひしはし みくね)

ロリータ顔の奔放な若妻で、顔に似合わない巨乳の持ち主。歳の離れた夫と結婚し悠々自適ながら、夜の営みが少ないのにやや欲求不満気味。

### 美園梨花

(みその りか)

妖艶なムードを漂わせた色っぽい有閑マダムにして老舗出版社の跡取り娘。会社を切り盛りする敏腕実業家で、性には非常に貪欲。

### 田村逸樹

(たむら いつき)

化粧品・健康食品・薬剤系商社の御曹司。父親のスパルタ教育の意向から、平社員としてどぶ板営業に繰り出す。

「んふう、逸樹君。可愛くてよ。はあはあ」

陰唇と肛肉をたつぷりと舌で責められ、どうにもこらえられなくなったのか。梨花は突然身体を起こし、チェアから下りた。逸樹は小さく「あつ」と声を漏らす。野生動物に急襲される小動物にでもなった気がした。荒々しく抱きつかれ、プールサイドの床に不様に尻餅をつく。

「脱いじゃったら、こんなもの」

梨花はそう言って彼のスーツを脱がせにかかった。

ネクタイをほどき、ホワイトシャツのボタンを外す。まさに、あれよあれよという間だった。ベルトを外してファスナーを下ろされると、プリーズごとストラックスを脱がされる。若竹のようにしなりながら、雄々しく勃起した陰茎が露出した。

「ソフフ。すぐ勃起してる……」

息を乱して言うと、熟女妻は彼の股間にまたがり、ペニスを手に取った。

逸樹は「うう」と小さく呻き、ピクンと身体を震わせる。梨花の手によって角度を変えられ、天に向かってそそり立つ薄桃色の肉棒。膝立ちになって自分の位置を変えた半裸の人妻は自ら腰を落とし、ぬめる淫肉と亀頭を密着させた。

クチュ——。

「ふはあ、い、逸樹君……ほしい？　ねえ、ここに……おちんちん入れたい？」  
言いながら、亀頭をワレメに擦りつける。

「い、入れたいです。あうう、気持ちいい。入れさせて下さい、おちんちん」

ヌルヌルした陰肉に亀頭を擦りつけられ、しぶくような恍惚感が爆ぜる。昨日体験したみくねの膣の猛烈な気持ちよさを思い出し、甘酸っぱい興奮が全身を焼いた。

「あん、可愛くてよ。ふはあ……」

興奮した声で言うと、梨花はさらに腰を落とした。豊潤な牝蜜を溢れかえらせた肉の中に、陰茎の先端がぬぶつと飛び込む。

「んああ、梨花さん。気持ちいい」

逸樹は背筋を仰げ反らせ、引きつった呻き声を漏らした。

狭く窮屈な肉溝の中に、吸いこまれるようにペニスが埋没していく。

ぬるぬると温かな膣肉とカリ首が擦れあうたびに、甘酸っぱい快感が爆ぜた。

「くふう、逸樹君……熱くて、硬い……ああ……それに、おつきくてよ。みくねちゃんと言った通りね……」

梨花は感激したような吐息を漏らし、彼の怒張を根元まで腹の底に飲み込みながら、みくねの話題を口にした。

「え。梨花さん、んああ……」

となると、やはり二人の間では話は筒抜けだったのだ。梨花を問いつめようとしたとたん、妖艶な熟女妻はいやらしく腰を振り、ペニスと膣肉を擦りあわせ始めた。

「うわっ。うわぁ」

「あん、気持ちいい。ふはぁ……」

亀頭の縁が膣壁と擦過するたび、火花の閃きにも似た電撃が陰茎を襲う。

「り、梨花さん、あの……みくねさんって……うはぁ……」

あまりの気持ちよさに早くも射精衝動が募るのを感じながら、逸樹は梨花に聞いた。「ソフフ……」

梨花は潤んだ瞳を艶めかしく細め、前後に腰をくねらせながら妖艶に微笑む。

「可愛い営業マンの男の子がいるから、いっぱい商品買ってやってって頼まれたの。

『あっち』の方もなかなかだから、お味見したりしながらって」

「お、お味見って。んああ」

梨花の説明に愕然としつつも、うまく言葉が出てこない。

下手にしゃべるとペニスが暴発し、精液を飛び散らせてしまいそうだった。

彼は必死に奥歯を噛みしめ、肛門括約筋を窄めて我慢しようとする。

「悔しいわ、みくねちゃんに童貞奪われちゃって。こんな可愛い男の子。あはあ……」  
梨花は屈み込み、愛おしそうに逸樹の頬を撫でては、うつとりと見つめた。彼女が前後に腰を振るたび、露出した巨乳がダイナミックに揺れる。

「んああ。そんな色っぽい顔して見ないで下さい。精子出ちゃう。我慢できない」  
逸樹は必死にかぶりを振り、梨花に訴えた。

「フフッ、ほんとに可愛い……あふう、んふう……おお……」

梨花の肉肌が艶つぼくぬめ光る。濡れているのはもはやプールの水ではなく、噴き出す汗の甘露のせいだった。毛穴から溢れ出した大量の汗のせいで、彼女の身体はローションでも塗ったみたいにヌルヌルとてかっている。

「さあ、もっと興奮させてあげてよ」

梨花は青年の怒張を腹の底に飲み込んだまま、ゆつくりと身体を回転させた。

「ううっ、梨花さん、んああ」

膣肉で陰茎を絞られるような強烈な刺激に、逸樹は不様な呻きを漏らす。

「逸樹君……はあはあ……見て、私のいやらしい姿。ふはあ……」

完全に逸樹に背を向ける形になった梨花は、彼のペニスを膣穴に食いしめたまま四つん這いの体位になった。完熟の巨大な尻桃が、挑発的に眼前に晒される。

「梨花さん。何ていやらしい。くう」

逸樹は淫らな眺めを目にし、息のしかたすら忘れそうな興奮を覚える。

「見て……あはあ、逸樹君……よく見ててね……ふわあ……」

梨花はもう一度艶めかしい声で言う、クネクネと腰を振り始めた。

「んああ、り、梨花さん、ふああ……」

熟女妻は四つん這いの格好のまま、尻肉を上下に揺さぶり始めた。プリプリした柔らかそうな尻桃が上下に揺れ踊り、もっちりした太ももの肉が淫らに震える。

「あふう、んおお。見える、逸樹君？ おちんちんと私のオマ○コが擦れてるところ

……あなたのおちんちん……ほら、出たり入ったりして……はう、んああ……」

梨花は猥褻な言葉を口にしながら腰をくねらせ、上へ下へと尻肉を踊らせる。

ひと抜きごと、ひと差しごとにペニスにまとわりつく愛蜜の量が増え、透明な粘液だけでなく、白濁した糊のような液体までもが付着し始める。

（なんていやらしい眺め。自分から卑猥に腰を振って。ううっ、おっきなお尻が、艶めかしくくねってる）

反り返りたい肉棒を変な角度に強引に拘束されての肉壺ピストンは、亀頭天部に強烈な刺激を注ぎ込んで来る。梨花が尻を跳ね上げては下降させるたびに、膣肉をえぐ

るように亀頭が食いこんだ。美貌の人妻は、妖しい喘ぎ声を惜しげもなく弾けさせる。「んふう。ほう、感じちやう……んああ、た、たまらないわ……ああふう……」

「梨花さん。んんっ、はああ」

「ふああ、気持ちいい……あん、やつぱり若い男の子って最高ね……くふう……」

梨花はとろけるような声で言うとうと上体を起こし、背筋を反らして腰を振った。

逸樹の手を求めるように、すらりと伸びた両手が後ろに差し出される。

青年はそれに応え、両手の指を熟女のそれに絡みつかせて彼女の体重を受け止めた。

「ああ、いいわ。あん、感じる、感じちやう……っはあ……」

「梨花さん、すごい汗。はあはあ」

美貌の人妻は全身から汗を滲ませていた。とりわけ激しいのは、肩から背中にかけてだ。玉のような汗が噴き出して尻の方に伝い流れる。

「汗出ちやうの……逸樹くんのおちんちんが子宮に刺さって……ふんう……」

興奮した声を上げた梨花は逸樹から手を放すと、両手で乳房を鷲掴みにし、グニグニと激しく揉みこねる。

「見て、逸樹君……っふうう、おっぱい揉んじゃうの……気持ちよすぎて……あん、し、しごいちゃう……んおお、我慢できない……おっぱいの先っぽしごいちゃう」

感極まった梨花は、勃起した乳首と先端付近の乳肉を両手で下から包み込む。

「ああ、感じちやう……気持ちいいの……ふわああ……」

まるで搾乳でもするような手つきでギュッギュと肉をしごき、恥も外聞もない淫声を高らかに響かせる。

「ううっ、梨花さん。んああ、オマ○コ、いっぱい締まって……」

「気持ちいいの……ふわっ、気持ちよすぎて、オマ○コ締まっちゃうの、はああ……」卑猥な興奮で体温が上昇したららしい梨花は全身から汗を噴き出させ、肉肌を艶光りさせる。狂ったようにくねる尻。熟れた人妻の声に、切迫した気配が漂い始める。

「ああ、だめ。もうイッてしまつてよ。逸樹君、我慢できない」

「えっ。あつ、梨花さん」

熟女妻の腰の動きがさらに激しくなった。ケダモノじみた声を「ああ。あああ」と張り上げて、爛れるような恥悦を貪る。どうやら一気に達しそうな気配だ。

「あん、ダメ……あつあつ、イッちやう……イッちやうう。ふわ……あああ！」

「あ……」

腹の底に食い締めた肉杭に貫かれたまま、全裸の美人妻は派手に身体を痙攣させ、アクメの衝撃に打ち震えた。不規則な引きつりを繰り返す肢体は、まるで電流でも流

されたようだ。逸樹に見られていることすら忘れた様子で、二つの乳房を自分の手で思いきり握りつぶしながら、何もかも忘れて絶頂の恍惚感に耽溺する。

「……イッチャったんですか、梨花さん」

「はあはあ。イッチャったわ……ごめんね、一人で……やだ、そんな顔しないで」

ようやく没我の天国から帰還した梨花は、ぜいぜいと荒い息を継ぎ、逸樹の股間から離れる。

「うわっ……」

ちゅぽん——。思いきり角度を変えられた怒張が、梨花の肉壺から外れた。ペニスは百八十度向きを変え、湿った爆ぜ音を立てながら、下腹部の肉に亀頭を打ちつける。「安心して。はあはあ。これで終わりなんて言わないから……」

梨花は四つん這いになると、両手で尻肉を掴み、尻の谷間を見せつけるように左右に開いた。

「うああ、こ、これは……」

「もつとしましよ……はあはあ……こんなことぐらいじゃ、許してあげなくてよ」

放射状に伸びたアナルの皺が横長に変形し、呼吸でもするように収縮している。梨花の汗は尻の谷間も、すでにぐっしりと濡らしていた。

「来て、逸樹君……今度は……こっちに入れてさせてあげる……」

「え。あの、梨花さん」

射精できずにジンジンと疼いたままのペニスを持てあましながらも、思わぬ展開に逸樹は狼狽する。

（こ、こっちについて……アナルに入れてくれるってこと？）

とうてい信じられない事態。こめかみの血管が切れそうな興奮を覚える。

「入れたくなくて、逸樹君？ 私のお尻の穴に、おちんちん……入れたくない？」

四つん這いの熟女は乳房でも揉むように双子の尻肉をまさぐり、誘うように振った。

「ああ、梨花さん……」

「入れさせてあげる。可愛いから。夫にだって許したことないのよ」

「えっ」

梨花の言葉に、逸樹は燃え上がるような感激と興奮を覚える。

（旦那にも許したことがないアナルに挿入できる？ 嘘だろう。で、でも……）

床から起き上がり、足下をふらつかせながら四つん這いの美牝に近づく。愛蜜まみれになってヌルヌルと白くぬめぬめ光る怒張が、雄々しく揺れた。

「君にあげる。私のアナル。特別な人だけに許してあげる、とっておきの贈り物」

「ううっ、梨花さん……ああ……」

淫らな高揚感のせいで熱が上がり、脳髓が完全に麻痺している気がした。

（う、嬉しすぎる。特別な人だけに許されたアナル……ああ……）

今の逸樹を動かしているのは、梨花の肛門の中で思いきり入れたり出したりして、心ゆくまで精液を飛び散らせたいという猥褻な欲望だけだった。

「り、梨花さん。入りたい。もう我慢できない」

全裸の人妻の背後に近づいた青年は腰を落とし、がに股気味に踏ん張った。

「ほんとに入れていいですか？ ねえ、いいの？」

腹の肉に密着するほど反り返ったペニスを手にとつて無理やり角度を変え、薄桃色の肛肉にクチュッと押しつける。酸味混じりの煮沸感がしぶき、全身が痺れた。

「あふう、逸樹君。入れさせてあげる……入れて……お尻の穴にちんちん入れて」  
「梨花さん。たまらないです」

自分もまた、一匹の淫らな獣にすぎないのだと思い知らされる瞬間だった。

獐猛な動作でさらに腰を落とし、熟女妻の尻肉を鷲掴みにする。「ふはあ……」  
という梨花の妖しい喘ぎを聞いていつそう激情を募らせ、一気に腰を前に突き出す。

「んはあ。逸樹君……おちんちん来た……ちんちん来たのお、ふはあ……」

南欧ムード満点の景色の中に梨花の嬌声が弾け、青空に吸いこまれていく。

こんな大声を出したら誰かに聞かれやしないかとも思ったが、今の逸樹を支配しているのは、それならそれで一向にかまわないというふしだらな劣情だった。

（これは。あつ。ううつ。アナルつてこんなにきつかったのか）

梨花の肛門の中にペニスを埋めながら、信じられない気持ちにかられた。

窄まりたがるアナルの締めつけは壮絶の一語。極小サイズの輪ゴムに思いきり肉棹を締めつけられ、その輪がズルズルと根元の方に移動していくようだった。

排泄粘膜のぬめりと温かさ、陰茎を包み込んでくる窮屈な感触は、膣とは違った何ともいえない気持ちよさに満ちている。ひくん——。ペニスにおもねるようにアナルが締まった。逸樹は為すすべもなく、美熟女の尻の中にカウパーを飛び散らせる。

「逸樹君、動いて。おちんちんいっぱい動かして……私のお尻の中で。はああ……」

「気持ちいい。たまらないです、梨花さん……ううつ……」

尻桃を掴んだ指に力を込めて人妻の動きを拘束したまま、逸樹は猛然と尻を前後に振った。小さくて強靱な輪ゴムが根元から亀頭まであますところなくペニスをしごく。

「ああん、あう、あう、ふはああ……」

「ううつ、き、気持ちいい……」



「え」

思わず聞き返した。いくら何でも、それはあまりに過激すぎないか。

「梨花さん」

「そうしたら……はあはあ……後ろから、スマタの責めでみくねちゃん虐めちゃうのはあ、ぞくぞくしちゃう……逸樹くん、見て……むふうう、私、こんなに興奮してる」梨花はパンストとショーツの中に大胆に手を入れ、自分のワレメを直接愛撫し始めていた。瞳がいやらしく潤んでいる。小麦色の肌が、興奮のせいで朱色に染まった。

「あはあ……分かる、逸樹くん？ クリトリス……ううん、マ○コ豆弄くってるの。マ○コ豆、指で揉みこねると、マ○コの中からいやらしい汁出ちゃう……」

「り、梨花さん……」

梨花の自慰を見ているだけで、強烈な麻薬でも注入されたような興奮を覚える。

「さあ、早く、逸樹くん……はあはあ……みくねちゃんにもっとひどいことして」

（ひ、ひどいこと……みくねさんに……ひどいこと……）

淫らな高揚感に全身を麻痺させた逸樹は、梨花の魔術にかかったように、みくねへの責めを再開した。片手を乳房から、もう一方の手を股間から離し、もう一度スカートを腰までたくしあげる。

「きゃっ……い、逸樹、何するの？」

「何って。みくねさんのしてほしいことするんだよ」

腰に食いこむパンストの縁に指をかけ、有無を言わせぬ荒々しさでショーッとごと、太ももの半ばぐらいまでずり下ろす。

「ひいい」みくねは引きつった悲鳴を上げ、全身をこわばらせた。

「う、嘘でしょ……やめて逸樹、恥ずかしい……スカート元に戻して、見られちゃう」

「だめ。下ろしてあげないです」

逸樹はスカートを腰の上までたくしあげたまま、背後からみくねに囁いた。

「は、恥ずかしいでしょ、馬鹿あ」

「恥ずかしいことしたいんでしょ……」

どんどん自分が自分ではなくなっていく。だがもう、下品な劣情を抑えられない。

彼の脇では興奮した吐息を漏らしながら、さらに大胆な手つきで梨花が自分の股間を愛撫していた。そんな彼女の指が、執拗に擦り続けていた逸樹の亀頭から離れる。

狂おしく反り返った怒張が若竹のようにしなり、先走りまみれの鈴口を震わせる。

「絶対声出しちゃだめだよ、みくねさん」

後ろからソフトに囁いた。周囲の目を気にしながら位置を整え、みくねの背中にさ

らに身体を密着させる。ロリータ妻の身体はじつとりと汗ばみ、驚くほど熱かった。

「逸樹……や、やだ、どうするつもり」

「分かっているくせに……」

戻り返った陰茎に手をやる。下がりがるスカートを再び腰の上までたくしあげ、みくねの尻肉を露出させた。ぴたりと閉じた肉感的な太ももと股の付け根の間にできる淫靡な逆三角形の空間に、ぐいっと亀頭を押し込む。

「ひはっ……い、逸樹い……あはぁ……」

みくねは慌てて、自分の口を片手で押さえた。

逸樹は強引に腰を突き出し、窮屈な逆三角の穴に、猛るペニスを挿入する。

「うう……」

狼狽したみくねは反射的に、さらに強く太ももを閉じようとした。

そのため、逸樹のペニスはそれまで以上に強烈に締めつけられ、もうそれだけで、亀頭の中からドロッと先走りを漏らしてしまう。

「だ、だめ……どうしたの、逸樹……酔っちゃったの……？ あふう……」

再びみくねの服の中に片手を潜らせ、形のいい巨乳を乱暴に驚掴みにする。

もう片方の手は彼女の股間に回し、ぷつくりと屹立したクリトリスに指を当てた。

ビクン——みくねが艶めかしく身体を痙攣させる。彼女の秘核は驚くほど大きく、硬く勃起し、肉鞘の中からいやらしく飛び出していた。

「いやん……こんなところで……そこまでは無理よおお……」

「無理じゃないでしょ、みくねさん。ほんとはメチャメチャ嬉しいくせに……」  
興奮して震える声で言いながら、逸樹はそろそろと腰を前後に動かし始めた。

「あふうう……」

若奥様の股の付け根と太ももの間を、猛る勃起が行ったり来たりし始める。みくねは全身を硬直させ、過敏さを増した性感地帯を刺激されるせつなさに悩乱する。

「や。ちょ、ちよつと……逸樹。それだめ……おちんちん、動かさないで……」

背後から羽交い締めにされた若妻は窮屈な体位で後ろを振り返り、息を殺して言う。警笛が鳴った。踏切を通過したと思うと、電車は長い鉄橋を渡り始める。

「んふうわああ……」

二人の美妻がそれぞれに艶めかしい声を上げ、慌てて唇を噛んだ。

鉄橋を走るせいで、電車の車体がそれまで以上に激しく揺れ、いやらしい肉を刺激する陰茎や指が、あたかもパイプのようになったのだろう。

「ぐうう……」

もちろんそれは、逸樹も同じだった。肉棒を締めつけるように包み込む股ぐらの肉が激しく振動し、得も言われぬ快感を注ぎ込んでくる。

「みくねさん。ああ、オマ○コ、すごく濡れてる。自分でも分かるでしょ、ほら」

逸樹はいやらしく腰をくねらせ、素股の責めでみくねを責め立てながら、熱い囁き声を耳朶に吹きかけた。片手はねちっこく乳房を揉みしだき、もう一方の手は円を描くように勃起陰核を弄くり回す。

「んわああ……や、やん、やめて……そんなことされたら声出ちゃうウウ……」  
うたろえた声でみくねが言う。

だがその表情には、言葉とは裏腹な妖しい気配が滲み出し始めていた。

恥ずかしいと思う気持ちや激しい狼狽さえもが強烈な媚薬になり、意志とは裏腹な発情状態へと彼女を高揚させていく。

「はあはあ……いいわ、逸樹くん……あなた、意外にSの才能あるかも……ふはあ」  
そう言いながら、さらにネチネチした手つきで自分の股間を愛撫するのは梨花だ。

「り、梨花さん」

「ふはううう、もう我慢できない……逸樹くん、興奮しちゃうわ……」

茹だるような高揚感に蝕まれた梨花は両手をパンストの縁にかけ、艶めかしく腰を

振りながら、太ももの真ん中あたりまでずりさげた。

布面積の少ない、シースルーのビキニショーツが露わになる。

(くうう、見える……中が……)

モジャモジャと生え茂る漆黒の恥毛が透け見えた。卑猥に開花しきったラビアが、卑猥な粘液を糊のようにしてぴったりと下着に張りついている。

「逸樹くん……ねえ、見て……見てえええ……」

梨花はショーツの前布を脇に追いやり、とろけきった秘部を露出させた。

恥ずかしそうにしながらも、伸ばした指を大胆にワレメに伸ばし、根元までぬめり肉の中に挿入する。

「んふふううんん……」

美熟女は感極まった吐息を漏らし、うっとりした顔つきで首をすくめた。

「あん、気持ちいいのお……電車の振動で……あふう……指がバイブみたいになって」

「ううっ、梨花さん。いやらしい」

興奮した梨花はワンピースの上からたわわな乳房を鷺掴みにし、乱暴な手つきで揉みしだいた。陰肉の中に指を挿入しているだけでは飽き足らなくなり、陶醉しきった猥褻な表情で、指を入れたり出したりし始める。

「あはああ……たまらない……逸樹くん、恥ずかしいけど気持ちいい……おふう……」

「梨花さん。ううっ、興奮しちゃう」

「……えっ。あ、り、梨花さん……」

ようやくみくねが、梨花のはしたないふるまいに気づいた。

「ああん、嘘でしょう……やん、感じちゃう……ふわはああンッ……」

みくねは息を呑み、梨花の淫熱が瞬時に感染したかのように、さらにいやらしい顔つきになって興奮を高めた。スマタの責めでペニスをピストンされるたびに派手に身をくねらせ、せつなげに悶えながら熱い吐息を秘めやかに漏らす。

「きやふうう……」

電車は鉄橋を通過し、トンネルに入った。

トンネルもまた、過激な振動で乗客を前後左右に激しく揺らす。みくねと梨花はさつき以上に卑猥な声を上げたが、その声は大音量の騒音に完全にかき消された。

「ふああ……だめ逸樹、感じちゃう……ちんちんスリスリされて感じちゃうウウ」

ようやく周囲を気にすることなく叫べると思ったのだろう。

みくねは窮屈な体位で後ろを振り返り、切迫した声で逸樹に訴える。

「みくねさん、オマ○コすごいヌルヌルだよ。ああ、振動のせいで超気持ちいい」

逸樹は強烈な恍惚感に全身を麻痺させながら、狂ったように腰を前後に振った。

床が小刻みに振動するせいで、ペニスを埋め込んだ股ぐらが絶え間なく震え、甘酸っぱくペニスを刺激する。

「あふう、逸樹……気持ちいい。こんなところでオマ○コスリスリされて……あはあ」  
「くうう、みくねさん……あむん……」

それに加え、みくねのワレメは淫蜜を溢れ返らせ、完全にとろけきっていた。

陰茎を入れたり出したりするたびに亀頭天部が下品な肉裂にこすれ、熱湯が煮沸するよような快感が爆ぜる。

「ふわあ、私も感じちゃう……んふう……気持ちよすぎて、汁いっぱい出ちゃう……」  
みくねに負けじと、周囲の騒音をいいことに、梨花も逸樹に甘えた。

「見て。逸樹くん、見て見てええ……はふう……」

艶めかしい声を上げると、自分の股間に埋め込んでいた指をズルリと抜き、逸樹の口に無理やり突っこむ。

「んふう、り、梨花さん。むはっ……」

逸樹は口の中に飛び込んできた汁まみれの指に戸惑いつつも、思わず舌を絡ませ、卑猥な舐め音を立ててしゃぶってしまう。

(すごい。ドロドロじゃないか。梨花さんも、こんなにオマ○コを濡らして……)

「逸樹くうん……ふわっ、ふわはああ……逸樹くううん……」

鼓膜を心地よくくすぐる媚声を漏らしながら、梨花は豊満な乳房を逸樹の腕に押しつけてくる。

熱く茹でたコンニャクみたいな感触に、逸樹はたまらず脳髓を沸騰させた。

「あん、気持ちいい……ふわっ、はふうう、ブラジャーの布が乳首に擦れて……」

「んああ、梨花さん……」

「勃起してるの……はああ……乳首敏感になっちゃって……あん、擦れるう……」  
艶めかしい声を上げながら、梨花はなおもグイグイと乳房を押しつけ、左右にも身体を揺らして豊満な肉塊を逸樹に擦りつける。

「感じちゃう……興奮しちゃうの……逸樹くん……たまらないわ……ふはああ……」

梨花はそう言って、またも逸樹の耳に熱い唇を押しつける。

「いじめて……みくねちゃんのこともつとつと……アッフウウン……」

発情美妻の妖艶なおねだり。

逸樹は全身を妖しく痺れさせ、火を噴きそうな劣情をみくねの女体に向ける。

「みくねさん、命令だよ。自分の手でおっぱい揉んで」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!